



1月は『水仙』

You Ain't Heard Nothin' Yet ! ヤー!

Vol.44 2023.01.10 えんじょい工房・『YAH!』編集室

やむなくの移動だったけど…

年末に不幸ごとがあり、思いかけずの移動（帰省）となった。

3年の間、断じて？動かなかったのだが、有無を言わせぬこととあいなった。

年末、旅行解禁、人手不足（保安検査スタッフが足りないという不始末）…で空港は大混雑！予約の出入をスムーズに捌けないとは、誰の、何処の責任か、推して知るべしである。

一時期に集中してしまうのも問題ありだが、対応する側としても、一体どの時点（人出のレベル）をもとにして体制を成しているのだろうか、混雑で対応が追い付かないのと、体制側の不備により不要の混雑と混乱が発生してしまうこととは大いに事情を異にするところだろう。

人的及び設備的にゆとりを持たった体制を組むと非効率、非経済的であるというのでは、無理を強いる相手を間違えているとしか言いようがない。安定した収益のための効率を求めるにしても、いたずらに無駄を無くすことは安全面・快適性の確保を前提としたうえでのことであると思うのだが…

多少の行列ぐらいいは辛抱もするが、不手際が原因とあらば話は別だ！

【こんな唄に出くわした】

冬の花

作詞：石坂まさる

作曲：平尾昌晃

歌：鮎川いずみ

怨みつらみが悲しくて
なんでこの世が生きざりよか
どうせ一度の花ならば
咲いて気ままに散ってくれ

春とおもえば 夏が来て
夏とおもえば 秋が来て
所詮最後は 寒い冬

夢を追って 奴がいりや
嘘に泣いてる 奴もいる
顔を合わせりや 他人街
誰に遠慮が いるものか

1982年に、「必殺仕事人 川」の主題歌としてリリースされたそう、ドラマの中で鮎川いずみといえ、何でも屋の加代を長く演じたことで記憶に残っている。特に上手い歌い手だとは思わない（そもそも歌手ではない）が、不安定な歌い方？もあって、なんとなく沁みてる、時代背景もよくよく思い起こされるのである。とにかくこのシリーズ自体、このあたりが最高潮であったらしい。西崎みどりのもの（『旅愁』、『流星』）は今でも時折聴かれる懐かしのヒット曲だが、これもまた気づかなかっただけで、もしかするとそうした存在なのかもしれない。

【今月の花 一月・睦月】

水仙

夏の『鉄砲百合』ほどの逞しさはないが、儂しいなりにやはり凛々としていて、見ている飽きない佇まいである。街中であっても、野道でも、穏やかさもあり、かと思えば、秘めた激しさも感じ取れるのだ。

【こんな映画を観てきた】

『オリент急行殺人事件』-1974/英・米 監督：シドニー・ルメット-

「ピエール、タオルが欲しいのだが、…」イスタンブール発パリ経由ロンドン・ヴィクトリア駅行き『オリент・エクスプレス』、2晩めのファーストクラス 寝台車にて、エルキュール・ポアロ（アルバート・フィニー）が個室の扉から顔だけ出して、車掌のピエール（ジャン・ピエール・カセル）に声をかけた一言で、厳密には間違っているかもしれないが、とにかくこう覚えている。髪を整え、ハンドクリームを丁寧に塗り込んで、シルクの手袋をして新聞をつまむようにページをめくり、消灯して、やがて事件の時を迎える。
演者も舞台も豪華絢爛の極致で、宮殿に派手な衣装で大舞踏会とは対極的な小さい空間で、さらに加えて旧ユーゴの山越えでの大雪に閉じ込められた深夜、ミステリーにとってこれ以上の舞台設定はないだろう。ストーリー自体はすでによく知られていて、“謎解き”の愉しみはないが、事件前の緊張感、そしてポアロが容疑者を一人ひとり追い詰めていくプロセスはさすがの演出だと思知らされる。“大スター”の面々、誰一人として“遊んで”はいない、いや、手を抜いていない、むしろ“やり過ぎ”くらいだ。
「クッダイハブ サム クリーン タオルズ？」カタカナで書くところなるか…